



# てこな ミューズ ジャーナル

## Tekona Muse Journal

2005年4月号

市川市文化振興財団公式ホームページ「てこなどっとねっと」 <http://www.tekona.net/>

市川市文化会館 能村館長・今月の一句

### 一声に似たるチェロの音春深し

#### \* 特別特集 \*

連載: 音楽を愛する作家たち・第3回  
 芸術文化専門員・小坂裕子の  
 ドイツ・ヘルマン・ヘッセ紀行

### ヘルマン・ヘッセへの旅

(市川市文化振興財団芸術文化専門員・小坂裕子)



前回から市川市芳澤ガーデンギャラリーで4月8日(金)から始まるヘルマン・ヘッセ展に因んだお話をしています。今回は音楽を愛し、水彩画を描いたノーベル賞作家ヘルマン・ヘッセの街カルフとチュービンゲンへの私自身の訪問記です。

ヘッセが一番に愛した音楽家はバッハでした。そこでまず、ドイツの新幹線と言われるICEで、フランクフルトからライプツィヒへ。到着したのは昼過ぎで、バッハの活躍したトーマス教会を目指しましたが、この街自体が戦争で全て破壊され新しく作り直されている上に、折悪しく旧市庁舎前の美しいはずの広場が地下鉄工事中。残念なことに期待した静けさも趣きもありませんでした。

ヘッセは本当にバッハを愛していましたから、この教会を訪ねたこともあったのではないのでしょうか。そして教会前の大きなバッハ像の前で、ここを訪れた人が誰でもするであろう記念撮影をしたかもしれません。

さて、バンベルク、ミュンヘン、シュトゥットガルトなどを経て、2月13日、いよいよヘッセの街カルフに向かいました。

シュトゥットガルト駅から近郊電車Sバーン6のヴァイル・デア・シュタットまで35分ほど、そこからカルフ行きのバスに乗り換えます。乗客は4人だけでした。外は雪。なだらかな丘をいくつも越え、1時間ほどで終点のカルフに到着しました。

冬のドイツの小さな街に人の姿など多いはずがありません。バス停のあるカルフ駅のロッカーに荷物を入れ、さあ、いよいよヘッセの街! と張り切ってはみたものの、駅員もいなくて店も日曜ですから閉まっています、それに雪がどんど

ん降り出して、寂しいことこの上ありません。こんな様子で果たしてヘッセ博物館など開いているのかしらと不安さえ感じていました。

駅前の歩道を渡り、ナゴルト川に架かるマルクト橋を渡ります。すぐに見えてくる市庁舎を右に曲がると、そこが石畳のマルクト・プラッツです。そこをゆるやかに上っていくと左に教会、正面にヘッセ博物館が見えてきます。真冬は日暮がすぐ来るというのに、開館は午後2時からです。まだ1時間半ほどもあるので、マルクト広場を戻り、ナゴルト川に架かるニコラウス橋に行きました。

橋の中ほどには、川に張り出すように小さなニコラウス教会があり、その傍らにほぼ等身大のヘッセの像が立っています。雪がどんどん降る中、はるか日本からカルフを訪ねてくると、ちょうど散歩に出たヘッセに出会えたような錯覚に陥りました。本当にそうってしまうほど、自然なしぐさのヘッセなのです。そのヘッセの傍らのニコラウス教会は1400年に建てられたということなので、1877年7月2日にこの街で生まれたヘッセがここに立っていると、不思議のない光景なのでしょう。このニコラウス橋のことは『車輪の下』に何度も出てきます。

さて再び、マルクト広場に戻り、まだ時間があるので食事をすることにしました。日曜日で店はすべて閉まり、人通りのない街ですが、レストランは開いています。木組みの美しい街並みの中の1軒に入ると、ほぼ満席でしたが、老夫婦のところ相席させてもらうことにしました。「日本から?」と聞かれましたが、小さなこの街に住む人が、会ったばかりの外国人を日本人だと分かるという不思議は、ヘッセ博物館の記念ノートの中に書かれた日本名が決して少なくないことで解明しました。

2時を過ぎてヘッセ博物館に行くと、もう何人も人が来ています。もちろん見学するのに困るような人数ではありません。入り口にある記念品の売店で、5ユーロのチケットを買いました。



【入場チケット】

【ヘッセ博物館外観】

Hermann-Hesse-Museum  
 und Ausstellung  
 Weißflechtwerk  
 Eintritt: 5,- €  
 + 04552

Die kleine  
**CALW**  
 Die Hermann-Hesse-Stadt

2階が博物館で、こじんまりした9部屋にヘッセの手紙、原稿、使っていた椅子や机、メガネ、ネクタイなどの生活用品や、ヘッセが描いた水彩画、使用した絵の具、出版された本の数々、ヘッセの日々を見せる写真など、さまざまなものが展示され、ヘッセ・ファンにはとても興味深い構成となっています。



【ヘッセ愛用の椅子】



【ヘッセが使用していた絵の具】

展示物の説明を一つずつ読み、ご自由にと言われたのでそこにある作品などを何枚も写真に撮っていると、16時23分発のチュービンゲン行きの列車の時間が迫っていることに気づきました。

それを逃すと大変です。日本のJRのようにはいきません。その後はまた1時間も電車がななどということに、ドイツでは驚いてはいけません。



【ヘッセの生家・現在は洋服店】

ヘッセ博物館を出て駅に戻る途中、広場のところにあるヘッセ誕生の家を外からみえました。ここは現在、シャーパー洋服店で、左側の扉にヘッセの横顔と誕生を記念する青銅製のプレートが掛けられています。

そこから駅に戻る前にもう一度、ニコラウス橋に行くと、途中にヘッセのレリーフのある噴水もあります。

ヘッセが作品に描き続ける、子供と青年への歩みの時代、その舞台となる街のイメージをたびたびカルフに求めることが、この街並みを見て納得できるような気持ちになりました。

小さな街で優秀な少年が難関の神学校に進み、やがて幻滅を感じながら「落ちこぼれ」ていく、そのような人生の原点がカルフの街にあるのでしょうか。ヘッセがこの街で暮らした年数は決して長くありません。けれども作品に直接、あるいはイメージとして登場するのは、この街への深い愛着の証拠です。そうしたヘッセの思い出の地であることを本当に誇りにし、大切に伝えていくという意味が、カルフの街のそここ

こに感じられました。

もし可能であれば、次回は夏、ここをまた訪れ、ヘッセが愛した自然に恵まれるシュヴァルツヴァルトの森を歩きまわり、そのどこかに腰掛けて、小説の一冊をひざの上に広げてみたいと、単線の電車を待ちながら、ほんとうに心から願いました。

カルフを出て、1時間半ほどでチュービンゲンに到着します。人口9万人近い街なのでさすがに人の姿は多いのですが、駅前には暗く、ネッカー川を渡ってようやく、街並みの美しさの中に人通りの幾分の活気を感じることができて、ほっとしました。

坂だらけのこの街は15世紀に始まる大学でその名を知られ、街のいたるところに大学の施設があります。ヘーゲルといった哲学者、ヘルダーリンなど多くの詩人、ケプラーなど科学者、じつに多くの人々がここに学び、教え、その足跡を残しています。

ヘッセがこの街に来たのは、少年から青年に向かう数年のうちさまさまな経験をした後のことでした。15歳で神学校を逃げ出したヘッセは、自殺未遂をするほど精神的に不安定になりました。どうにか高等学校に入りなおしたものの、翌年には退学してしまいます。故郷カルフで牧師の父の手伝い、やがてカルフに今も残る時計製作所見習い工をするなどして、18歳でチュービンゲンの書店で働き出しました。

その書店は今も残っています。時計と壁画の美しい市庁舎前のマルクト広場からシュティフト教会はすぐで、その教会前の広場に面してヘッセが4年間働いていたヘッケンハウアー書店があります。穏やかで知識と文芸にあふれる大学街の雰囲気や育まれ、教会のオルガン演奏によるバッハ作品の数々に耳を傾け、一日の時間の流れはその教会の鐘が教えてくれる、そんな日常の中でヘッセは詩や散文を書き、作家への道を徐々に歩み始めたのです。



【ヘッセが働いた書店】

今回の市川市芳澤ガーデンギャラリーに展示されるヘッセの水彩画は、時間的にはこの時代からさらに20年後ということになります。その頃までにヘッセは『車輪の下』『青春の嵐』『クヌルプ』などなど、多くの作品を次々に発表してドイツを代表する作家としての名声を得ています。けれども、いつの時代の作品にもカルフと若きチュービンゲンの日々への郷愁がちりばめられているのです。

## 画家と詩人 ヘルマン・ヘッセ展

4月8日(金)～5月22日(日) 月曜休館  
市川市芳澤ガーデンギャラリー (047) 374-7687